

衣替えしませんか？

竹ヶ原 政 輝

奨励者紹介〔たけがはら・まさてる〕

日本キリスト教団高の原教会牧師

同志社大学キリスト教文化センターチャプレン

同志社大学神学部嘱託講師

さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい、あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。

だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。

（コロサイの信徒への手紙 3章1—11節）

衣替えしませんか？

1月の半ばに「衣替えしませんか？」というのは、ずいぶん時季外れに思われたでしょう。学内の掲示板の前を通りがかった人の中には、「まだ早いよ」と思った人が多かったのではないのでしょうか。もしかしたら、「さすがに雪も降ったし、そろそろ冬物を出すか」と考えた人もいたかもしれません。最近は気候もなんだかおかしい感じで、昔に比べて衣替えのタイミングも難しくなっているような気がします。正直なところ、私はほぼ全部、家族に任せています。そんな私が取り次いで良いものかと思いますが、今日の聖書の言葉は、まるで私たちに衣替えを奨めているような、そんな箇所です。

新約聖書からコロサイの信徒への手紙3章の記事をお読みしましたが、その9節から10節にかけてこうあります。「古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです」。古い人を脱いで、新しい人を身に着ける。奇妙な表現のようにも聞こえますが、これに近い言葉は案外、新約聖書の中に度々出てきます。たとえば、パウロの真正の手紙の一つであるローマの信徒への手紙13章12節。「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう」。あるいは、今日のコロサイ書と同じくパウロが書いていると言いながら実際

には著者不明の手紙の一つ、エフェソの信徒への手紙4章 22 節から 24 節。「以前のような生き方をし情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」。

これらはどれも、「いつまでもそんなものを着てはダメですよ」と言っています。時期が来たにもかかわらず、身に着けているものを変えようとしないうちに、衣替えを促しているように聞こえます。これらの一つである今日の箇所、コロサイ書の言葉を少し詳しく見ていきましょう。

ポケットの中のもの

先ほど取り上げた9節の言葉、「古い人をその行いと共に脱ぎ捨てなさい」というのは、具体的には8節で言われているようなことと思われます。「今は、(中略)怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい」。このことを手紙の著者は奨めています。確かに、これらのものを捨てられるといいなと思います。最初の「怒り」という感情は、確かに怒るべき場面というものもあるのですが、やはり抱いて気持ちのいいものではないと個人的には思いますし、自分だけではなくて周りの人も不愉快にさせてしまう場合が少なくありません。怒りにまかせていろいろなものを吐き出してすっきりするということはあるかもしれませんが、そこで吐き出されるのは、まさに「恥ずべき言葉」であつたりもします。そういうものは捨てた方がいい。では、どうやって捨てるか。

ポケットから紙くずを出して、丸めてゴミ箱にポイと放るような簡単なものではありません。簡単ではないと言うか、キリがない。こっちのポケットのやつを捨てたかと思ったら、こっちにも入っていた。それを捨てたと思ったら、内ポケットにもあった。何かが根本的に変わらなければ、それは気付くとポケットの中にある。そんな人間の現実を知ってか、手紙の著者はこう言います。「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着けなさい」。それは、ポケットの中のものを取り出して捨てるというよりは、そのポケットの付いた上着からズボンから全部脱いしてしまうようなことなのではないでしょうか。そして、新しい服を着る。そのポケットには別の新しいものが入っている方が良いでしょう。それは、また後でお話ししましょう。

禁欲と福音

著者は、5節と8節でいくつかの悪いものをリストアップしています。「みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲」、それに先ほどの「怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉」。これらを捨てなさいということに加えて、9節では「互いにうそをついてはなりません」と奨めます。これらをつなぐと、ひとくりにするものとして「地上的なもの」という言葉が使われます。「『地上的なもの』を捨て去りなさい、それらはすなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲です。貪欲は偶像礼拝にほかならない」といった具合です。

著者がここで警告しているのは、この「地上的なもの」に支配された生き方です。その生き方を離れるのが良いと奨められているようですが、このように聖書は禁欲を奨めていて、クリスチャンというのはいわゆる禁欲主義者なのだという理解を生みがちです。生みがちですが、実際はちょっと違います。むしろこの手紙の背景にあるのは、キリストを信じ、その福音に生きる人々の自由な生き方について禁欲主義者があれこれ言っていたという状況です。それに対し手紙の著者は、禁欲主義者というのは戒律に縛られた

人々であり、それはつまるところ地上的なものに支配された生き方にすぎないということを指摘します。

このあたりのことについて、直前の箇所、2章の終わりの部分を引用してみましょう。「あなたがたは、キリストと共に死んで、世を支配する諸霊とは何の関係もないのなら、なぜ、まだ世に属しているかのように生き、『手をつけるな。味うな。触れるな』などという戒律に縛られているのですか。これらはみな、使えば無くなってしまうもの、人の規則や教えによるものです。これらは、独り善がりの礼拝、偽りの謙遜、体の苦行を伴っていて、知恵のあることのように見えますが、実は何の価値もなく、肉の欲望を満足させるだけなのです」(2章 20 節—23 節)。

禁欲主義というのは、一見、立派に見えるのです。まるで聖なる生活をしているような、あるいは一つ高い次元の生活を目指しているように見える。そのような禁欲主義の人々からの批判に、やっぱり禁欲も大事かなと思ってしまう人が、福音による自由を重んじる教会の中に出てきたのでしょう。それがこの手紙が書かれた背景のようです。

洗礼・復活・衣替え

手紙の著者は、勿論、無秩序で放縦な生活を奨めているわけではありません。悪いものとは戦わねばならない。ただ、そこで大事なことは何かを間違えてはいけないと言うのです。大事なものは、ポケットの中身を捨てることにやたらと一生懸命になることではない。それは自分の努力だけに頼ろうとする禁欲主義でしょう。本当に大事なものは、ポケットごと古い服を脱ぎ捨て、新しい服を着ることでした。これは一つのたとえです。しかし、キリストを信じて生きようという決断は、実にこういうことなのだと思います。

今日の箇所の冒頭、「あなたがたは、キリストと共に復活させられた」とあります。いまや新しい命に生きているということです。これは「生まれ変わる」という言い方の方が日本人にはぴんとくるのかもしれませんが、この表現は聖書的ではありません。何にしても、キリストへの信仰を告白し、洗礼を受けること、これらをとおして人はキリストの復活に連なる者とされると教会では信じられています。ここに身に着けているものを変えるというイメージを、この手紙の著者は抱いているようです。2章 11 節、12 節でも「あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです」と言っています。

この洗礼によってもたらされる新しい命への招きに対し、まだ早い、まだ早いと思っている人がいるとします。もしその思いが、まだポケットの中身を捨て切れていないから、いろいろなものがポケットの中にあるのが分かるので、自分は洗礼を受けるのにふさわしくないといった考えから来ているのだとすれば、それは少し思い違いをしています。神はポケットを空にする努力を成し遂げた禁欲主義者を救われるのではないからです。いろいろな悪いものを持っている私たちを憐れみ、良い方へ導こうとしてくださっている神の愛を信じて、神の子であるイエスと共に生きていこうという決断をする。そこに「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着け、日々新たにされる」歩みが始まります。それは、一定の経験値を積んだのでレベルが上がりましたといったような何かを成し遂げて起こる変化ではなくて、むしろ、自分の力では成し遂げられないことがあるということを認める一種の諦めから生じる変化です。季節が変わることを私たちの力で押しとどめることができないように、その時期は来る。そして、その時が来たら、着ているものを変えずにはいら

れなくなる。そういうタイミングがどこかに用意されているのだと思います。

新しい季節への招き

今日のチャペル・アワーでこのような話をする気になったのは、明日（1月14日）が、私の受洗記念日にあたるためです。ちょうど25年目になります。この同志社という大学をとおして与えられた出会いと経験をきっかけに、私は受洗を決意しました。この衣替えは、さすがに人任せにはできません。自分自身の決断が必要です。とは言え、それに先立つ神の招きがありました。衣替えをしたから季節が変わるのではなく、季節が変わったから衣替えをするようなものです。私に衣替えを促す、神の働きかけが先にありました。何にも成し遂げられていない、ポケットの中にいろいろなものを忍ばせ、抱え込み、持て余している私に、神は新しい季節が始まっていくのだと感じさせてくださいました。

当時のコロサイの教会の人々には自分たちが触れていた教え、キリストの福音よりも禁欲主義者たちの言っていること、やっていることの方がより具体的で実践的と思われたのかもしれませんが。そこに感じられる魅力があったのでしょう。たぶん、そういうことは今でもあるのだらうと思います。聖書を読むより、自分を変える、自分を良くしてくれる近道を示してくれていそうな本やサイト、YouTubeの動画などはたくさんあります。でも、私はやっぱり聖書が示している人間の根本的な問題に触れることがなかったら、本当の解決はないような気がします。

衣替えができたなら、新しい服のポケットには新しいものが入っているのが良いと言いました。それが今日の箇所の続きのところに書いてあります。「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい」と12節にあります。そして続く14節。「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです」。良い言葉だと思います。これが私たちの究極的に身に着けるべきものです。実際、洗礼を受けたからすっぱり悪いものと手が切れるというわけではありませんし、すぐに成熟した愛を身に着けられるわけではありません。私も25年間、何度も衣替えを繰り返すように悔い改める日々を送ってきました。でも、そこに「日々新たにされる」ということがあったと思います。そして、コロナ禍を経験している私たちにとって、人間の本質的な部分について語る聖書の言葉は、ますます意義深いものであると感じさせられています。皆さんがこの大学で過ごされるさまざまな場で、それら聖書の言葉に出会われること、願わくは、その中に衣替えを促す神の声を聞くことができますよう。

2021年1月13日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録